教職員と保護者、それぞれの本音

わが子の進路選択や大学の支援に、保護者はどんな思いで関わっているのか。逆に、そこで距離を置くのはなぜか。高校・大学側の見方と合わせ、紹介する。

高校・大学の声

「進学・就職に対する保護者の関心が高まった」「安定志向が根強い」等の実感と共に、新たな認識の下での学校側の努力の必要性も指摘された。

高校の現場から

保護者に大学について説明するときに「こういう専門性が身に付く」と言うと、**以前は「なるほど」で終わっていた**のが、近年は「どんな資格が取れるのか」「専門性を生かした職に就けるのか」など、**突っ込んだ質問**を受けるようになった。　埼玉県・私立本庄東高等学校 3年学年主任　須賀 安夫教諭

地方では、都市部とそれ以外で**経済的な格差や情報格差**があり、保護者の受験への関与度も違ってくる。保護者の現役志向は、経済的な事情に加え、**浪人に対する一面的な認識**も影響している。高校で勉強が十分ではなかったが予備校で成績が伸び、国公立大学に進学する生徒もいる。予備校の広報努力に加えて、高校も情報支援に努め、浪人は一概に回避すべきとも言えないと理解してもらう必要がある。岡山県立勝山高等学校　三浦 隆志教頭

大学の現場から

保護者との**懇談会は、約3割が両親そろって**の出席。個別面談では、「希望のゼミに入れなかったのでこの先が心配」といった細かい相談も多いが、本学に限って言えば**モンスターペアレントはいない**。保護者も本学の卒業生だと、個別相談でも大学に対する信頼感がベースにあるのを感じる。
立教大学 教学連携課　足立 寛課長

保護者から、**学費を払う条件として教員免許取得**を課される学生が増えた。本人の適性を尊重すべきでは、と思うこともある。
京都造形芸術大学　生駒 俊樹教授

本人以上に保護者の安定志向が強い。良い教育をしている大学よりも、**自宅通学圏内にあり、**公務員や大企業への就職実績に秀でた大学や学部を選んで薦めるようだ。
沖縄国際大学　藤波 潔准教授

これから研究室を選ぶ1、2年生の保護者が、私の**研究室のフェイスブックページをチェック**して「興味深い」などのコメントを残すことが結構ある。研究がメディアで紹介されることは大学への貢献と考えてきたが、最近は、保護者の関心と誇りにもつながると思うようになった。
工学院大学　後藤 治常務理事・教授

保護者の声

高校生の保護者は、大学の真の姿を見極めようと、できる限りの情報を集めようとする。入学後は大学を積極的に支援する保護者がいる一方で、大学と一定の距離を置く保護者もいる。

高校生の保護者から

娘は研究職希望なので大学院の研究内容が知りたいが、大学案内には載っていないし、ウェブサイトではその情報までなかなかたどりつけない。**研究室ごとの就職先一覧も載っていない場合、**その大学の得意分野を想像すらできないので、**志望校の候補から外す**。研究内容についてもわかりやすく詳細に公開してほしい。

宮城県の県立高校2年女子の母・主婦　藤田 千恵子氏

偏差値だけが大学選びのモノサシではないことも、大企業に入ることが全てではないことも、身をもって知っている。**どれだけの力が付き、どんな人脈がつくれる**のかを知りたいから週刊誌のランキング特集を読んだり、オープンキャンパスに行ったりする。全ては**わが子に幸せになってほしい**から。

千葉県の私立高校3年男子の父・会社員　笹井 清範氏

在学生の保護者から

「首都圏の大企業は無理だが地元の企業に就職できるだけの力を付ける」と断言する大学の**就職支援、考え方に共感し、保護者会役員を引き受けた**。少しでもこの大学の良さを広めたい。

滋賀県の私立大学3年男子の父・会社員　世森 英樹氏

娘の大学には**保護者会はないが、あったとしても行かない**。大学生になった以上、自立し、自分に責任を持ってほしい。必要に応じて相談にはのるが、娘の状況を大学に教えてもらう必要はない。大学の教育と娘を尊重したい。

東京都の私立大学2年女子の母・会社員　宮崎 みゆき氏

保護者が語る「大学を支援する理由」

息子の様子を見ていると、通っている高校は面倒見がよく、教育熱心だとわかる。だから保護者会役員として支援している。大学も、**一緒に盛り上げていきたいと思える学校**であってほしい。

埼玉県の私立高校3年男子の父・会社員　富田 実氏

企業が株主に経営状況を報告するのと同じく、大学は学費の支弁者である保護者に教育内容や子どもの成長具合を報告するべき。だから、保護者会はあって当然。**大学に期待しているからこそ動向を注視するとともに、いい意味での緊張関係でありたい**。

埼玉県の私立大学2年女子の父・会社員　小田島 正忠氏

保護者として、企業人として大学の力になりたい

わが子が通う大学に共感する保護者は、積極的に大学を支援してくれる。仕事上の経験をふまえて大学の人材育成を評価しているという父親に、大学との関わり方について聞いた。

菖蒲田 清孝氏

マツダ（株）執行役員生産担当技術本部長。2度のアメリカ駐在後、タイ現地法人の社長に就任。2010年4月に日本に帰任し現職。立命館アジア太平洋大学に通う2年生の保護者で、2012年5月からAPU-Club・国内学生父母の会運営委員。

父の仕事環境を通して国際性を意識した息子

仕事上、海外出張の機会が多く、アメリカやタイに数年間、駐在していたこともある。そうした経験の中で、国内では有能なのに、海外に出るとその力を生かせない従業員を数多く見ており、息子には学生時代に異文化に揉まれる経験をしてほしいと考えていた。

本人の意思を優先し大学選びには口を挟んではいないが、息子自身、私の駐在先で生活したり、私が日本の自宅に招いた外国人の仕事仲間と接したりした経験から、進学先を考えるにあたり、「国際性」を強く意識していたと思う。

高校3年次の春、息子が選んだ志望校が、立命館アジア太平洋大学（以下、APU）だった。名前を聞いたことがある程度の認識だったため大学のウェブサイトを見たところ、グローバル人材の育成に焦点を当てた教育をしていることを知り、企業人として推薦できる大学だと感じた。息子は「知識の修得だけでなく、外国人との付き合い方も学べる」点に魅力を感じたようだ。

入学して2年弱の今、APUは息子に合っていると思う。長期休暇の際に顔を合わせる程度だが、会うたびに成長を感じる。例えば、「共用の台所をどうしたら清潔に保てるか」といったほんのささいなことではあるが、外国人学生との共同生活を円滑に進めるために悩んでいる姿からは、異文化コミュニケーションのスキルが磨かれている様子が伺える。RA（レジデント・アシスタント。寮での世話役）、TAなどを自主的に引き受けており、社会人に必要な前に踏み出す力、チームで働く力などが鍛えられていることを実感した。

求められる人材像を伝え大学の長所を伸ばしたい

学生生活を知るにあたっては、息子から直接聞く他、「APU-Club・国内学生父母の会」（以下、父母の会）が主催している地域懇談会で、在学生や卒業生が話した体験談が大変参考になった。息子が偶然、成長の機会に恵まれたわけではなく、世界で通用する人材を育てる教育システムが充実している大学だということがわかり、「ここで勉強していけば大丈夫」と安心できた。

大学への信頼感が増しつつあった2012年初春、大学事務局から父母の会の運営委員への就任依頼があり、この大学の力になれるなら、と引き受けることにした。企業が必要とする人材像や社会が大学に期待することなどを、少しでも伝えられればと思っている。

国外の市場を重視する国の多くは、世界で活躍できる人材の育成を前提とした教育に力を入れているが、日本はその意識が弱いように思う。それもあって日本の大学は世界の中でそれほど高く評価されていない。また、国内の知名度が高い大学に入学できれば良しとする人が多く、企業もまだ大学の教育内容ではなくブランドを指標としている現状がある。

私自身は学生生活の中で、専門知識だけではなく、文化、思想などが異なる相手と議論をし、信頼関係を構築できるコミュニケーション能力を培うことを期待している。APUには、それをなし得る教育環境がある。

今後は保護者および企業人としての立場から、育てるべき人材像を大学と深く語り合い、APUの長所を伸ばす手助けをしたい。他の学生の保護者にも大学への協力を促したいし、機会をもらえるならば、高校生の保護者にはAPUの魅力と企業が求める人材像を伝え、大学選びに生かしてほしいと考えている。